# 言葉遊び

## 平仮名五十音喧嘩

Ｒａｉｎ坊

「あっちいけ！」

いきなり突き飛ばされた。僕の身体はクラスのみんなと比べるとかなり小柄だ。あまり腕っぷしが強くないタイラ君にも簡単に突き飛ばせた。僕は床に勢いよく倒れ込み、いてぇっと思わず叫んだ。それがなんだか情けなくて、僕は誤魔化すようにタイラ君のことを思いっきり睨んだ。一瞬、びくっとしたタイラ君だったがすぐに睨み返してきて、

「カナ君が悪いんだからな！　小さいクセにいつもナマイキだから……」

教室ではクラスのみんなが何事だとこちらの方を見ている。僕も何が起きているのかよく分かっていない。仲良しの、それこそ一番の友達であるタイラ君が急に怒り出したのだ。ケンカなんてしたことなかったのに。どうしてこうなったのだろう。今までの友人関係はこちらの勘違いだったのだろうか。不安に思う、と同時にやっぱりむかつきもする。なおさら彼が怒っている理由を聞き出してみたいと強く思った。僕は一層睨む力を強めた。少し眼がしんどかったけどタイラ君が睨み続けている限りこっちだって負けてはいられない。鋭い眼光が僕とタイラ君の間で衝突する。しばらくその状態が続いた。クラスのみんなが先生を呼んでこようかどうかと相談しているのが耳に入ってくる。冗談じゃないと思った。それならいっそのこと突き飛ばされたお返しをしないと気が済まない。そう考えた僕は、立ち上がってすぐにタイラ君に向かって体当たりをした。うっ！　と、タイラ君が呻いた。

チャンスと思った僕はそのまま勢いを利用して押し倒し、タイラ君の身体に馬乗りになった。ぎゅっと力を込めて拳をつくり、それをタイラ君の眼前に突き出すと、

「てめーは僕を怒らせた」

と言い放つ。これはお父さんが持っている漫画に登場するキャラクターの台詞だ。奇妙なものだ。自分が強くなったみたいに感じてしまう。『強い言葉』――それを行使することによって僕たちに力を宿らせる。良くも悪くも。それは無差別に。そして無自覚に。

ぬめりとした感触が手の甲を覆った。気付くと僕の手は血だらけになっていた。それが眠ったように倒れているタイラ君のものなのか自分のものなのかは判然としない。己がどのくらい彼に拳を浴びせたのかなど、今となっては興味がない。それより現在、僕の関心は何とも言い表せない爽快感を自分が感じていることだ。すっきりだ。しかしタイラ君も一人だけ殴られたわけではない。必死の抵抗を示した。それによって僕の肉体にも多大な負荷を与えている。そういう意味では完璧にすっきりしたとは言えないものかもしれない。

変な気持ちだ。妙な気持ちだ。喧嘩なんて今まで一度たりともやったことがなかったから矛のおさめどころが分かっていないのかもしれない。高揚した自分が自分じゃないようだ。

真っ赤に染まった手を眺める。鉄の濃い匂いがして金属の手にでもなったみたいだ。意味もなくぺろりと血を舐めとった。そうでもしないと心まで鉄製になってしまう気がした。無論そんなことはないけど、それでもぺろぺろと舐めた。周りを窺うとクラスのみんなに目を逸らされた。何をそんなに怖がるのだろうか？　僕は不思議でたまらなかった。先生も騒ぎをききつけていつの間にかやって来ていたが、僕を眺めて立ち尽くすだけだった。

やれやれと頭を振って、僕は教室を出るために歩き出した。

「歪みないねぇ、本当に君は。でも言ったはずだよ――それがナマイキだって」

よく確認しなかったのがまずかった。声がした方――後方を急いで振り返った。ふらふらで血みどろになりながらも僕のすぐ目前にまで接近したタイラ君の姿がそこにはあった。理解した。僕は本能でそれを把握したのだ。己の敵と――それに伴う自身の生命の危機を。

「ルールを破ろう、一度だけ。そして最大の罪を背負おう。馬鹿野郎のお前のために」

憐憫の眼差しを僕に向けてくる。何故そんな顔をするんだろうか。何をしたというのだ。ろくでもないと理解していても言ってくれなきゃ分からない。変えようがない。突然、なわとびで首を強く絞められた。なんとか脱出しようと試みたが相手はびくともしない。何をしても駄目だ。意識が遠くなる。彼はどうしてこんなことをしたんだろうか、タイラくんんんうぅぅ――――――――……。彼の意識はそこで完全に途絶えたのだった。

（平仮名五十音喧嘩　了）